

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：44604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17396

研究課題名(和文) 高校教育から労働社会への移行過程を再編成する教育実践の展開論理

研究課題名(英文) Developing educational activities in the part-time high school for reorganizing school-to-work process.

研究代表者

杉山 晋平(Sugiyama, Shimpei)

奈良佐保短期大学・地域こども学科・講師

研究者番号：30611769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、札幌市の定時制高等学校において展開されている「実社会の生産活動と連動した地域連携型キャリア教育プロジェクト」を対象としてフィールドリサーチを実施し、高校教育から労働活動への移行過程を再編成する教育実践の可能性を検討した。実践研究の結果として、既存の社会に適応していくことを準備させるだけでなく、既存の社会を維持し、創造し変容させていくという挑戦を準備させることを含めたキャリア教育が必要であり、その実現にあたっては生徒たち(若者世代)の学習活動とそれを支える教育関係者と職場関係者とが学び合う研修活動とを相互に作用させる媒介的な実践共同体が不可欠であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to seek a possibilities of the new form of learning and schooling in school-to-work transition process from the case study of project-based learning in the part-time high school in Sapporo city, based on the ethnographic field research on cross-curricular and full-year program called "Honeybee Project", which challenges to interact between working and learning. In this study, we establish the possibility of new career education by mutual development between changing learners (including students, teachers and collaborator from local community) and changing communities, that is, horizontal nature of learning in "school-to-work" transition.

研究分野：社会教育学、生涯学習論

キーワード：キャリア教育 移行過程 定時制高校 労働活動 学習論 水平的発達

1. 研究開始当初の背景

若者世代の「学校教育から労働社会への移行過程」は大きく変貌し、とりわけその困難は高卒者の就労状況に凝縮されて立ち現れた。他方、少子高齢化や人口一極集中が進む中、地方においてはその持続的発展を担う若者の定着が切実な課題となっている。

かつてのキャリア教育研究の多くが「所与のキャリアトラックに依拠した進路選択」において生徒個人の意識や選択要因を分析してきたのに対し、学校教育、地域社会、労働活動(職場)それぞれの関係性を変化させていくキャリア教育の可能性を探究していくことが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、札幌市の定時制高等学校において展開されている「実社会の生産活動と連動した地域連携型キャリア教育プロジェクト(ミツバチ・プロジェクト)」を対象としたフィールドリサーチを実施し、「(A)高校教育と労働活動(職場)を往還する生徒たちの学習経験」、「(B)それを支える学校教職員・協力企業・地域関係者の意識やかかわりの変化」、そして、「(C)ミツバチ・プロジェクトの展開を媒介する実践共同体(community of practice)」の間の相互作用を分析し、高校教育から労働活動への移行過程を再編成する教育実践の可能性を検討することを目的とする。

さらに、一連の調査研究を学校現場との協働実践研究として取り組んでいくことで、地域に根ざしたキャリア教育実践モデルを開発することも本研究の目的に含める。

3. 研究の方法

本研究は、札幌市の定時制高校のキャリア教育実践、その協力先である複数の地元企業や専門職業人、そして両者とプロジェクトの展開を媒介する組織的な研修活動を調査研究の対象として設定した。

研究方法は、(1)基礎研究、(2)インタビュー調査、(3)実践調査、(4)協働実践研究という4つの柱で構成し、それらを互いに連動させながら、学校教育と労働活動を往還する若者たちの学習経験の諸相を多角的に析出すると同時に、それを支える各現場の関係性の変化を分析した。

(1)基礎研究

(2)以降の調査におけるデータ収集と重ねて分析枠組みを洗練させていくために、国内外の社会状況も十分に踏まえながら幅広く文献・資料を検討した。

主にヴィゴツキー学派の社会歴史的活動理論に依拠した先行研究、特にヨーロッパで先行されている若者の移行過程に関する発達のワークリサーチ研究(developmental work research)の知見を参照するとともに、国内研究における若者の移行過程をめぐる

現状や動向の理解、先進事例に関する資料検討を行った。

表1 調査研究対象のフィールド

フィールド	概要
(a) 定時制高校	生産活動と連動した地域連携・教科横断型ミツバチ・プロジェクト
(b) 地域の協力者・関係者(職業人)	定時制高校との共同事業(養蜂・採蜜, 商品開発, 販売), 異業種交流活動
(c) 媒介的な実践共同体	定時制高校・地元企業・地域関係者からなる実践共同体, キャリア教育実践に関する課題の把握・組織間連携・事業運営とその省察・評価

(2)インタビュー調査

ミツバチ・プロジェクトの具体的な展開に即して、上の表にあるフィールド(a)~(c)にわたってインタビュー調査を実施した。学校、職場、地域社会それぞれにおける生徒たちの活動の様子、教職員や地域の関係者による生徒たちへのかかわりや生徒理解、ミツバチ・プロジェクトの成果や課題をめぐる解釈を継続的に聞き取った。

また、一連のプロジェクトが学校、職場、地域社会にもたらした影響、相互の関係性の変化についても解釈を聞き取ってきた。

録音されたインタビューデータは文字起こし、年度ごとにグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく分析を進めた。なお、分析の結果は、(4)協働実践研究にも結びつけて活用した。

(3)実践調査

研究期間前期は、フィールド(a)における授業場面やフィールド(b)における実習場面での参与観察及び半構造化インタビューを集中的に実施した。研究期間後期にかけては、生徒たちの振り返りや実践記録作成場面に焦点をあてた実践調査を実施した。それらの調査で得られたフィールドノートと(2)インタビュー調査で得られたデータをもとに、生徒たちの学習経験とミツバチ・プロジェクトの発展過程に関する民族誌的な二次データを構築した。

(4)協働実践研究

発達のワークリサーチ及び学校拠点方式の協働実践研究の方法論をフィールド(c)に援用し、多様なプロジェクト活動の振り返りとその交流を通じて定時制高校・地域関係者が学び合い、若者世代の移行支援の可能性と課題を協議する省察的なカンファレンスを

定期的に実施した。

上記(1)～(3)の分析データを積極的に活用し、地域に根ざした新しいキャリア教育実践モデルの開発とその発信に関係者と協働で取り組んだ。

4. 研究成果

(1)ミツバチ・プロジェクトの構造と発展

ミツバチ・プロジェクトは、3つのサイクルで構成され、その発展過程は「複雑化と拡大」という性質で特徴づけることができる。

表2 3つのサイクルと主な授業科目

サイクル	授業科目	活動内容	協力者
養蜂・採蜜	工芸	巣枠製作	養蜂専門家・地域住民やボランティア・PTA
	動物の生態	飼育・内検・採蜜	
	地域の生態系	地域調査	
	学社融合講座	飼育・内検・採蜜	
商品開発	工芸	蜜蝋キャンドル・ワックスづくり	企業・飲食店・シェフ・パティシエ・農家・PTA
	総合実践	メニュー開発	
	フードデザイン	メニュー開発	
	書道美術	ラベル・パッケージのデザイン	
交流・販売	総合実践	渉外・マーケティング・販店舗運営・会計・商品管理	企業・飲食店・イベント団体・接客指導者

表2は正課の授業内で取り組まれているプロジェクト関係活動であり、計画的に組織された教育実践である。それ自体にも広がりが生じているが、プロジェクト全体としての動きはより複雑なものとなっていた。

例えば、多くの外国人観光客が訪れる札幌市の観光イベントと接点が生まれれば、「英語」の授業実践で外国語版の商品パンフレットが製作されたり、外国語で直接商品を紹介するボランティアとして活躍する生徒が現れたりする。また、ちょうど韻文を学習していた「現代国語」が連動し、蜂蜜を活用した新商品の名前を考案する、といった具合であった。

同様に、このようなアメーバの収縮運動にも似た活動の展開過程は、課外活動へも波及している。例えば、インターネットやローカルFMを通じて高校生活の様子を発信している学校放送局に所属する生徒たちは、年間を通じてミツバチ・プロジェクトの密着取材に取り組み、その進捗や魅力を校内外に発信し、

新商品紹介や販売情報告知といった販売活動の側面支援も担うようになった。渡日・帰国生徒と日本人生徒とが部活動の一環として各国料理を蜂蜜でアレンジし、販売促進に貢献するといった活動も展開された。

さらに、ミツバチ・プロジェクトが地域社会とのつながりを通じてその活動を積み重ねていく中で、校外の協力者の輪も大きな広がりを見せていった。

(2)プロジェクトを支える学習活動

このように複雑化し、拡大を続けていくミツバチ・プロジェクトを支えているのが、重層的な学習活動であった。

データ分析の結果、生徒たちの学習経験は自らが関与した「部分」をプロジェクトの生産活動「全体」に位置づけ直すことで、自らもまた価値を生産する主体の一員であることに気づき、次の試行錯誤へと一歩踏み出していくというプロセスとして特徴づけられた。

また、生徒たちは実社会の専門職業人に出会い、プロジェクトを共にすることで、自らの未熟さ(imaturity)を学ぶとともに、自らの可能性(potential)をも予感させるモデルを獲得していることが明らかになった。

それを支える教職員は、生徒たちの挑戦を支える校外の専門職業人の存在や地域社会で活躍する生徒たちの姿を振り返りながら、自分たちの日常的な教育実践を見つめ直し、時として学校教育そのものの存在意義を捉え直すといった学習経験が生じていることが確認できた。

同様に、地域の関係者においても日々の労働を振り返り、見つめ直し、その意味を捉え直すとする学習を経験している。例えば、地元企業の関係者であれば、未熟でありながらも懸命にプロジェクトに取り組む生徒たちの姿に過去の自分の記憶を重ね合わせ、働くことや「人を雇う、採用する」ことの意味を問い直すという意識の変化が生じていることが明らかになった。そのような学習経験の蓄積は、プロジェクトに関わる地域関係者の輪を広げ、連携・協働を持続させる機能を持っていることも確かめることができた。

(3)学習活動の重層化と移行過程の再編可能性

本研究では、このような生徒たち(若者世代)、教職員(学校教育)、地域関係者(労働活動、職場)それぞれの学習経験を相互に作用させ、活性化させながらプロジェクトの展開を支える実践共同体の形成に取り組んだ。この共同体は、学校現場との協働実践研究としてデザインし、実施してきた「ラウンドテーブル」事業(年1回開催)として具体化した。

このラウンドテーブル事業は、(1)多様な関係者が世代や分野をこえて実践経験を持ち寄り(多様性)、(2)互いの省察を支え合うこ

とでその成果と課題を学び合い(省察)(3)その省察を深めるツールとしての様々な記録(媒体)を基盤とする研修活動である。

回を重ねるごとに、学校と地域を横断した教育の可能性、学校教育から労働活動へと移行する若者世代の支援の可能性を探究する議論が蓄積され、それを起点に「働きながら学ぶ、学びながら働く」ことに挑戦するプロジェクトのビジョンが明確なものとなっていった。

その下で開発された教育実践プログラムに共通しているコンセプトが「仕事場の学校をこえて、生徒たちを真ん中に学校、地域、職場が水平的な変化を遂げていく教育モデル」である。

教育とは、人間が既存の社会に適応していくことを準備させ、世代をこえて知識・技術・価値といったものを継承していく営みである。歴史的には、学校教育は労働からの要請として制度化され、労働の準備として機能し、将来の社会生活に有益な知識・能力を学習する場として期待されてきた。

しかし、ミツバチ・プロジェクトによって提起された実践モデルは、人間が既存の社会を維持し、人間が社会を創造し変容させていくという挑戦を準備させる教育とその可能性である。

以上のような実践モデルの実現を試みるにあたっては、生徒たち(若者世代)の学習活動とそれを支える教育関係者と職場関係者とが学び合う研修活動とを相互に作用させていくこととその媒介的な実践共同体の果たす役割が重要であることが本研究を通じて明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

杉山晋平、「学校から仕事へ」の移行過程における水平的発達を支えるカリキュラムの可能性 定時制高校における教科横断・地域連携型プロジェクト学習の実践展開に注目して、奈良女子大学教育システム研究開発センター教育システム研究、査読無、第11号、2016、81-96

杉山晋平、高大接続改革をめぐる課題と実践的展望 - 高大連携ラウンドテーブル事業のあゆみをふりかえって -、福井大学高等教育推進センター年報、査読無、第5号、2016、29-54

杉山晋平、言語的・文化的多様性を生きる学び - 中国帰国者三世を中心とした表現活動の事例分析 -、多文化関係学会『多文化関係学』、査読有、第12号、2015、89-103

〔学会発表〕(計5件)

小林真弓、蒲生崇之、河本健一、キム・ヒュン Chol、岡部敦、ポニー・ワット、ナンシー・アーサー、杉山晋平、社会的包摂をめざすキャリア教育の可能性: 札幌・ソウル・カルガリーの取り組みから考える、日本キャリア教育学会第38回研究大会特別企画シンポジウム、2015

杉山晋平、西野功泰、学びとる - 地域・学年・教科をこえたアクティブラーニング -、NPO 法人日本キャリア・カウンセリング研究会公開キャリア教育研究会、2015

杉山晋平、地域が教育をつくるラウンドテーブル、2015 年度北海道キャリア教育・職業教育フォーラム、2015

Sugiyama Shimpei, Nishino Yoshiyasu, Horizontal nature of learning in "school-to-work" transition: A case study of project-based learning in a part-time high school., International Conference 2015, IAEVG (International Association for Educational and Vocational Guidance), 2015.

杉山晋平、未来につながる合同探究に向けて「三つの種」を手がかりに、札幌市立高校三校合同ラウンドテーブル - 未来につながる合同探究 -、2016

〔その他〕

鈴木恵一、西野功泰、杉山晋平、市立札幌大通高等学校発行、市立札幌大通高等学校「ミツバチプロジェクト: 地域連携実践報告書 2015-2016」、第2巻、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山 晋平 (Sugiyama, Shimpei)
天理大学・人間学部人間関係学科生涯教育専攻・准教授
研究者番号: 30611769